後原遺跡 II

－ 第12・14～16・20・21次、Ａ地点の調査 －

大野城市文化財調査報告書　第93集

２０１０

大野城市教育委員会

後原遺跡 II

－ 第12・14～16・20・21次、Ａ地点の調査 －

大野城市文化財調査報告書　第93集

２０１０

大野城市教育委員会

序

後原遺跡は、大野城市のほぼ中央部、白木原１丁目に広がる遺跡です。

この遺跡は、これまでの調査の結果、江戸時代の白木原村に相当することがわかっており、当時の村の様子を知ることができる大変重要な遺跡です。

今回報告する７ヶ所の調査地点は、いずれも狭小な面積で、また遺構密度も高いものではありませんが、遺跡の広がりを考える上で有意義な調査成果を得ることができました。

もちろん、今回の発掘調査だけでは解明できない部分も多くありますが、こうした成果を一つ一つつなぎ合わせ、また文献資料を用いることによって、発展していく村の様子や、生き生きとした先人たちの暮らしぶりが明らかになってくるものと期待しています。

その一環として、本書が多くの方々に活用され、地域史理解の手掛かりとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました事業者の方々、周辺にお住まいの皆様に厚くお礼申し上げます。

平成22年３月31日

大野城市教育委員会
教育長　古賀　宮太

例　言

1．本書は、大野城市教育委員会が発掘調査を実施した、大野城市白木原１丁目に所在する後原遺跡第12・14～16・20・21次調査およびＡ地点の報告である。後原遺跡は、これまで１～６次調査の成果を『後原遺跡Ⅰ』として報告しているため、これに倣って本報告を『後原遺跡Ⅱ』と呼称する。

2．遺構写真は、各調査担当者が撮影した。

3．遺構図は、各調査担当者および発掘調査作業員が作成した。

4．遺物実測図は、林潤也が作成した。

5．製図は、渡部美香が行なった。

6．遺物番号は、通し番号とした。

7．第１図は、国土地理院発行の地形図『福岡南部』を基に作成した。

8．本書に掲載した遺物・実測図・写真は全て大野城市教育委員会にて管理・保管している。

9．本書に使用する土色名は、『新版標準土色帖』農林水産省技術会議事務局監修を使用した。

10．本書の執筆は、Ⅲ・Ⅴ・Ⅸ章を舟山、Ⅵ章を丸尾、その他および編集は林が行なった。

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに
　1．調査・報告書作成に至る経緯 …… 1
　2．調査体制 …… 1

Ⅱ．位置と環境
　1．地理的環境 …… 2
　2．歴史的環境 …… 2
　3．これまでの調査 …… 4

Ⅲ．後原遺跡第12次調査 …… 7

Ⅳ．後原遺跡第14次調査 …… 8

Ⅴ．後原遺跡第15次調査 …… 10

Ⅵ．後原遺跡第16次調査 …… 11

Ⅶ．後原遺跡第20次調査 …… 12

Ⅷ．後原遺跡第21次調査 …… 14

Ⅸ．後原遺跡Ａ地点 …… 19

Ⅹ．まとめ …… 21

表　目　次

第１表　後原遺跡調査地点一覧 …… 6

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡分布図（1/25,000） …… 3
第２図　これまでの調査地点と包蔵地の範囲（1/2,500） …… 5
第３図　第12次調査遺構配置図（1/100） …… 7
第４図　第14次調査遺構配置図（1/100） …… 8
第５図　SD01～04土層図（1/30） …… 9
第６図　第15次調査遺構配置図（1/100） …… 10
第７図　第16次調査遺構配置図（1/100） …… 11
第８図　第20次調査遺構配置図（1/100） …… 12
第９図　出土遺物実測図（1/3） …… 13
第10図　第21次調査遺構配置図（1/150） …… 15・16
第11図　SX01～03、SD01・02実測図（1/30） …… 17
第12図　出土遺物実測図（1/10、1/2、1/3） …… 17
第13図　Ａ地点遺構配置図（1/100） …… 19
第14図　大正15年と現在の遺跡周辺（1/25,000） …… 21

図　版　目　次

本文図版　(1)第20次調査作業風景 …… 13
本文図版　(2)第21次調査地から地禄神社を望む …… 18
図版１　(1)第12次調査北西部完掘状況（南から）　(2)第12次調査北東部完掘状況（南から）
図版２　(1)第14次調査Ａ区完掘状況（西から）　(2)第14次調査Ｂ区完掘状況（西から）
図版３　(1)第14次調査SD02土層堆積状況(西から)　(2)第14次調査SD03土層堆積状況（西から）
　　(3)第14次調査SD04土層堆積状況(東から)
図版４　(1)第15次調査SD01完掘状況(東から)　(2)第15次調査SD02完掘状況（北西から）
図版５　(1)第16次調査北半完掘状況(北から)　(2)第16次調査南半完掘状況（南から）
　　(3)第16次調査SD01完掘状況(北から)
図版６　(1)第20次調査完掘状況（北西から）　(2)第20次調査地点から地禄神社を望む(西から)
図版７　(1)第21次調査Ａ区完掘状況(北西から)　(2)第21次調査Ｂ区完掘状況（東から）
図版８　(1)第21次調査Ａ区北側拡張部完掘状況(東から)
　　(2)第21次調査SD01・02土層堆積状況(東から)　(3)第21次調査作業風景

Ⅰ．はじめに

１．調査・報告書作成に至る経緯

後原遺跡は、白木原１丁目周辺に広がる奈良時代・江戸時代の遺跡で、平成３年度のＡ地点の調査以降、これまで22回に及ぶ調査が実施されてきた。

この間、当該地周辺は、市および県による道路事業や駅前整備事業、また民間企業による共同住宅建設などが積極的に行なわれ、町の様子は大きく姿を変えてきた。

後原遺跡は、こうした公共事業や共同住宅建設に伴って発掘調査が進められてきたが、小規模な調査地点が多いこともあり、このたび計７地点（第12・14～16・20・21次調査、A地点）の調査報告をまとめて刊行することとなった。

２．調査体制（平成21年度以外は担当者のみ）

平成３年度（1991年）後原遺跡Ａ地点

教育長		久野英彦
社会教育課	課長	岡部弥之助
	課長補佐	青木克正
	技師	舟山良一(調査担当)

平成10年度（1998年）後原遺跡12次調査

教育長		堀内貞夫
教育部長		高橋正治
社会教育課	課長	片岡　猛
文化財担当	係長	舟山良一（調査担当）

平成11年度（1999年）後原遺跡14～16次調査

教育長		堀内貞夫
教育部長		青木克正
社会教育課	課長	片岡　猛
文化財担当	係長	舟山良一(15次調査担当)
	技師	丸尾博恵(16次調査担当)
	嘱託	熊代昌之(14次調査担当)

平成12年度（2000年）後原遺跡20次調査

教育長		堀内貞夫
教育部長		青木克正
社会教育課	課長	片岡　猛
文化財担当	係長	舟山良一
	技師	林　潤也（調査担当）

平成13年度（2001年）後原遺跡21次調査

教育長		堀内貞夫
教育部長		鬼塚春光
社会教育課	課長	片岡　猛
文化財担当	係長	舟山良一
	技師	林　潤也（調査担当）

平成21年度（2009年）報告書作成

教育長		古賀宮太
教育部長		森岡　勉
ふるさと文化財課	課長	舟山良一
文化財担当	係長	中山　宏

主査　徳本洋一　石木秀啓　丸尾博恵

主任技師　林　潤也　早瀬　賢　上田龍児

嘱託　石川　健　大里弥生　中島　圭

吉田浩之　下高大輔（～９月）

Ⅱ．位置と環境

１．地理的環境

大野城市は、北側に三郡山地、南側に背振山塊から派生する牛頸山に挟まれ、中央部には御笠川などに起因する沖積平野が広がっている。その形は、南北に長く、中央部がくびれたいわゆる「ひょうたん」形を呈している。遺跡の所在する白木原地区は、大野城市のほぼ中央部、御笠川とその支流である牛頸川に挟まれた沖積平野の一角に位置する。地質学的には、住吉層と呼ばれる氾濫原・三角州堆積物（形成年代9000年前～1500年前）を基盤とし、これを切り込むように遺構が形成されている。

現在の白木原地区は、ＪＲ大野城駅や西鉄白木原駅、九州自動車道太宰府インターチェンジ、国道３号線が近接するなど交通の便に恵まれ、住宅地・商業地として賑わいをみせている。

２．歴史的環境

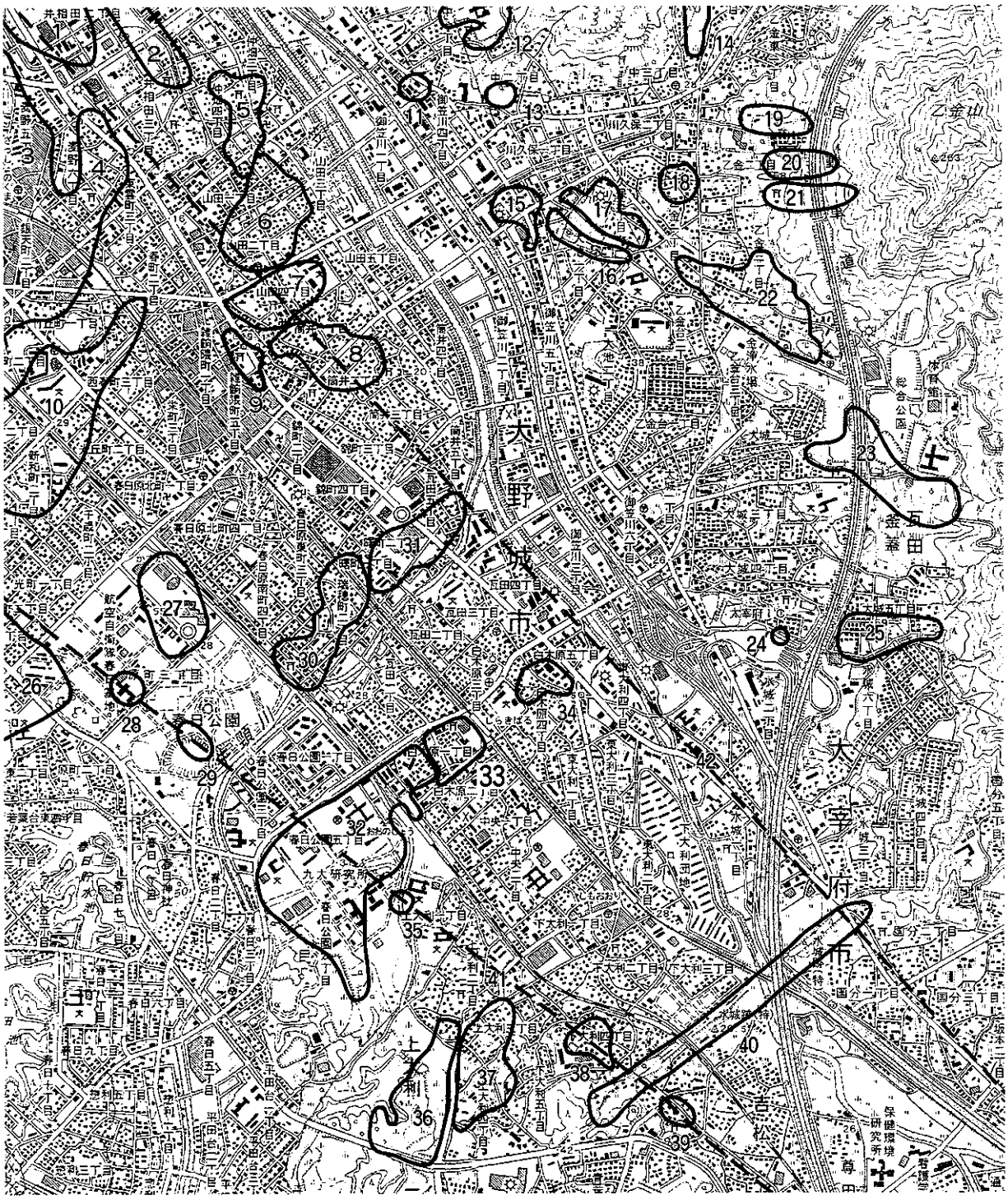
次に周辺遺跡の動向を概観したい。

旧石器時代　市内では釜蓋原遺跡、雉子ヶ尾遺跡、本堂遺跡２次、出口遺跡などで当該期の遺物が確認されており、北部の乙金山・大城山や南部の牛頸山から派生する丘陵地帯が主な生活の舞台であったと想定される。

縄文時代　旧石器時代と同様に、市域南北の丘陵地帯で複数の遺跡が確認されるほか、石勺遺跡や原口遺跡など沖積地に面した低丘陵部でも生活の痕跡が把握されている。時期的な動向としては、本堂遺跡５次や石勺遺跡Ｆ地点、釜蓋原遺跡など早期の遺跡が多く、前期～中期の遺跡は春日公園遺跡が知られる程度、後期～晩期には、九州大学筑紫地区遺跡、塚原遺跡、日ノ浦遺跡など再び遺跡数が増加するという傾向が窺われる。

弥生時代　前時代と比べ、遺跡数・遺物量とも飛躍的に増加する。特に中期～後期には、春日丘陵上の「須玖岡本遺跡群」と称される一帯が特筆され、青銅器・鉄器工房を含む集落、奴国王墓に代表される墳墓群が面的に把握されている。一方、市内においても、集落遺跡として本堂遺跡、御陵遺跡、村下遺跡、石勺遺跡などが、墓地遺跡として塚口遺跡、中・寺尾遺跡、御陵前ノ椽遺跡、石勺遺跡、森園遺跡などが確認されているが、比較的小規模な遺跡が多く、春日丘陵上とは際立った相違を見せる。また沖積地～低丘陵上の遺跡が多い点も当該期の特徴といえ、水田耕作を志向した遺跡立地が窺える。

古墳時代　市域北部の月隈丘陵および乙金山・大城山から派生する丘陵上では、多くの古墳が出現する。三角縁神獣鏡が出土したと伝えられる御陵古墳群や市内最大の円墳である笹原古墳など前～中期古墳も散見されるが、その多くは６～７世紀代に集中し、王城山古墳群、古野古墳群、喜一田古墳群など数多くの群集墳が築造されている。集落遺跡としては、沖積地～低丘陵上に営まれた仲島遺跡、原ノ畑遺跡、森園遺跡、上園遺跡などが挙げられるが、現時点では古墳群に比べやや貧弱な観は否めない。また、６世紀中頃には九州最大の須恵器窯跡「牛頸窯跡群」が開窯する。牛頸窯跡群は、９世紀中頃に至るまで操業を続け、東西４km、南北4.8kmの範囲において、これまで300



1.井相田C遺跡　2.仲島遺跡　3.麦野A遺跡　4.麦野B遺跡　5.川原遺跡　6.御笠の森遺跡　7.宝松遺跡
8.村下遺跡　9.雑餉隈遺跡（大野城市）　10.雑餉隈遺跡（福岡市）　11.塚口遺跡　12.御陵古墳群
13.御陵前ノ椽遺跡　14.唐山遺跡　15.ヒケシマ遺跡　16.中・寺尾遺跡　17.森園遺跡　18.松葉園遺跡
19.喜一田古墳群　20.王城山古墳群　21.古野古墳群　22.薬師の森遺跡　23.雉子ヶ尾遺跡　24.笹原古墳
25.釜蓋原遺跡　26.立石遺跡　27.駿河遺跡　28.先ノ原遺跡　29.春日公園内遺跡　30.瑞穂遺跡　31.石勺遺跡
32.御供田遺跡　**33.後原遺跡**　34.原ノ畑遺跡　35.池田遺跡　36.本堂遺跡　37.上園遺跡　38.谷川遺跡
39.島本遺跡　40.水城跡　41.官道（水城西門ルート）　42.官道（水城東門ルート）

第1図　周辺遺跡分布図（1/25,000）

基以上が調査されている。

奈良時代　7世紀後半に成立した大宰府は、8世紀前半には政庁・条坊ともに大規模な整備が進む。またこの頃には、官道の整備も行なわれるが、本市内では水城西門ルートと東門ルートが想定されており、谷川遺跡、池田遺跡で西門ルートが調査されている。集落遺跡は、麦野遺跡群、南八幡遺跡群、雑餉隈遺跡群、塚原遺跡や本堂遺跡1次などで確認され、このうち後者2遺跡は、牛頸窯跡群の工人集落の可能性が指摘できる。牛頸窯跡群は、窯の広がり、基数ともに最盛期を迎え、杯・皿など供膳具に特化した生産体制に変化する。このほか、石勺遺跡では火葬墓、仲島遺跡では人面墨書土器、本堂遺跡7次では墨画・墨書土器が出土しており注目されよう。

平安時代　9世紀代に至ると、遺構・遺物量は激減する。こうした傾向は、大宰府条坊域や周辺集落、牛頸窯跡群などでも同様であり、特に牛頸窯跡群は終焉を迎える。10世紀以降については、本堂遺跡7・10次で多量の土師器が、呪符木簡、「大日如来」墨書土器などとともに谷部に投棄された状況で出土したほか、小水城周辺遺跡や谷川遺跡、御供田遺跡などで遺構・遺物が確認されている。墳墓については、薬師の森遺跡、森園遺跡、塚口遺跡など市域北側を中心に調査されており、当該地域の開発史を考える上で興味深い。

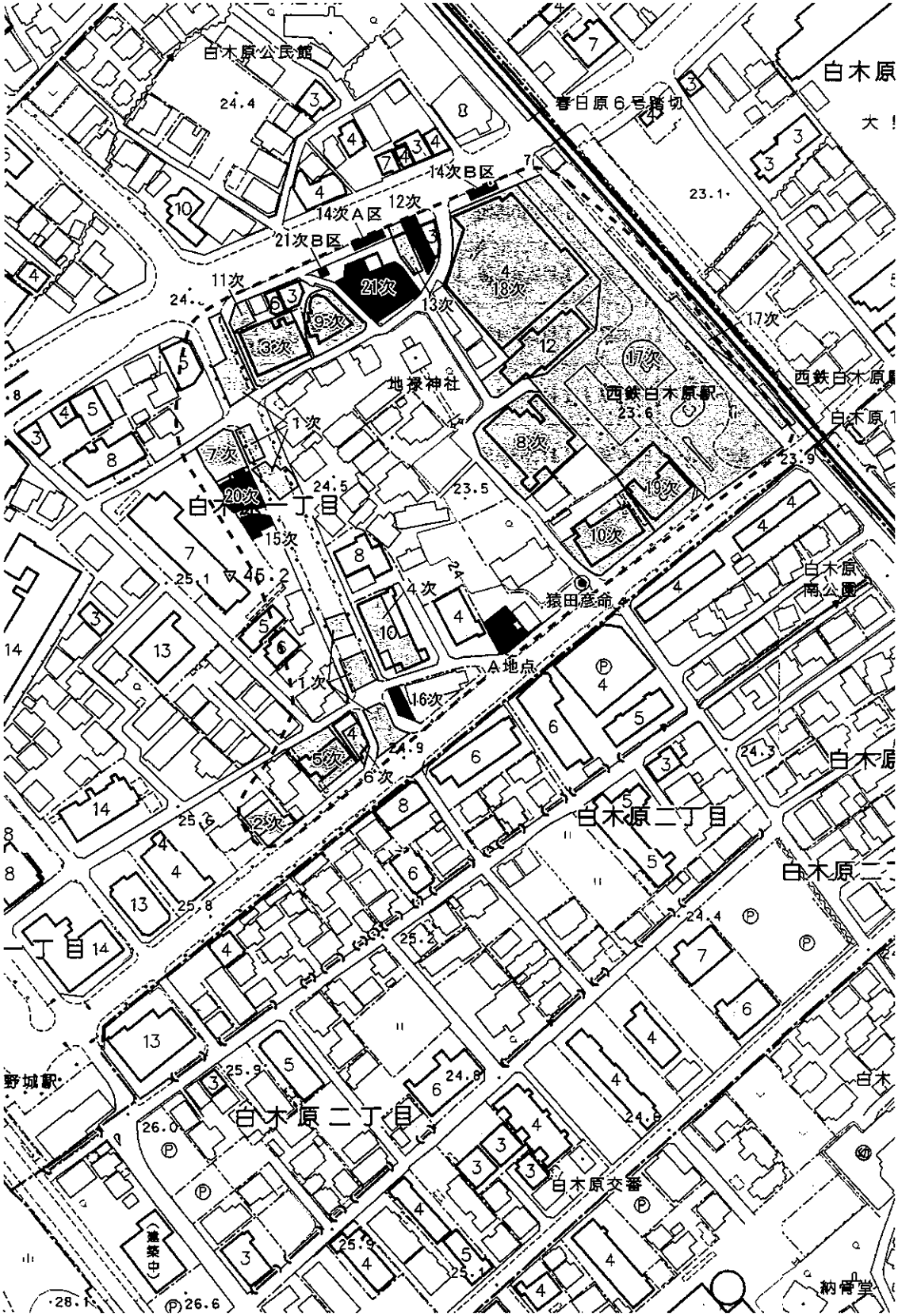
鎌倉時代～戦国時代　当該期の遺構・遺物は、御笠の森遺跡、本堂遺跡2次、川原遺跡などで確認されている。御笠の森遺跡は、11世紀中頃から17世紀後半まで継続的に集落が営まれており、特に16世紀に方形区画溝によって画されたエリアが7区画隣接して検出された点は、当該期の集落形態を考える上で興味深い。なお、未調査ではあるが、市内には唐山城、不動城という2つの中世山城が所在しており、前者は大友氏方、後者は筑紫氏方の出城と考えられている。

江戸時代　後原遺跡のほか、御笠の森遺跡、雑餉隈遺跡、村下遺跡、川原遺跡、屏風田遺跡などで遺構・遺物が出土している。当該期の集落は、現在の集落域に重複している場合が多いため小規模な調査が多く、集落の全体像が把握できる例は稀である。御笠の森遺跡は、前代から続く集落が17世紀後半に突如消滅するが、この集落動態については、『筑前国続風土記拾遺』の山田村の記載「此村昔は御笠森の辺にあり、延宝のころ（延宝年間：1674～1680年）今の地に移せり」と一致しており、集落移転の契機とともに注目されている。雑餉隈遺跡は、日田街道沿いに位置し、特に2次調査で出土した「ＶＯＣ銘入り染付皿」は、「間の宿」（博多宿と二日市宿の中間の宿場）として栄えた往時の姿を伝える遺物といえよう。

3．これまでの調査

後原遺跡は、これまで22地点約15900㎡を調査した（第2図、第1表）。ほとんどの調査地点で近世を中心とする遺構群が確認されており、近世の白木原村の一集落「本村」に該当することが明らかとなっている（註1）。特に、第8・10・16～18次調査では明確に居住域が、第1・3・7次調査では墓域が確認されており、現存する地禄神社などと含めて、近世集落の景観を復元する上で極めて重要な遺跡といえる。

註1）大野城市教育委員会　1999　『後原遺跡Ⅰ』大野城市文化財調査報告書第53集



第２図　これまでの調査地点と包蔵地の範囲（1/2,500）

調査次数	調査期間	調査場所	調査面積	調査原因	報告書	概　　要
A地点	**1991.5.8～5.11**	**白木原１丁目267-5**	**120㎡**	**公共事業代替地**	**本書**	**調査時名称：前田遺跡 近世溝、ピット**
１次	1994.8.23～10.28	白木原１丁目233-40他	1255㎡	街路築造	大野城市53集	近世墓100基以上、土坑群ほか
２次	1994.10.24～10.31	白木原１丁目290-6他	200㎡	公共事業代替地	大野城市53集	中世土坑？
３次	1995.4.3～5.9	白木原１丁目234-8他	709㎡	共同住宅建設	大野城市53集	近世墓54基、奈良時代土坑ほか
４次	1996.6.10～7.27	白木原１丁目267-4他	356㎡	共同住宅建設	大野城市53集	近世土坑、ピット
５次	1996.6.24～7.25	白木原１丁目283-1	337㎡	共同住宅建設	大野城市53集	時期不明溝、ピット
６次	1996.7.25～8.5	白木原１丁目283-3他	70㎡	共同住宅建設	大野城市53集	時期不明溝、ピット
７次	1997.9.30～10.31	白木原１丁目234-5他	147㎡	公共事業代替地		近世墓ほか
８次	1997.12.15～1998.3.23	白木原１丁目258-1	1145㎡	共同住宅建設		近世井戸、土坑、ピット
９次	1998.1.17～2.10	白木原１丁目236	239㎡	医院建設		時期不明溝、ピット
10次	1998.4.24～7.21	白木原１丁目260	712㎡	共同住宅建設		近世井戸、土坑、ピットほか
11次	1998.4.20～5.9	白木原１丁目233-34	32㎡	店舗建設		時期不明ピット
12次	**1998.9.24～9.30**	**白木原１丁目241-1**	**50㎡**	**公共事業代替地**	**本書**	**時期不明土坑、ピット**
13次	1999.6.1～6.9	白木原１丁目240-1他	119㎡	公共事業代替地		時期不明溝、ピットほか
14次	**2000.2.19～3.4**	**白木原１丁目237-13他**	**70㎡**	**街路築造**	**本書**	**時期不明溝、ピットほか**
15次	**1999.9.17～10.4**	**白木原１丁目280-5**	**45㎡**	**公共事業代替地**	**本書**	**時期不明溝、ピット**
16次	**1999.11.25～11.26**	**白木原１丁目525-3他**	**18㎡**	**公共事業代替地**	**本書**	**時期不明溝、ピット**
17次	2000.4.20～2001.3.23	白木原１丁目257-15他	5275㎡	公共施設建設		近世区画溝、井戸、土坑、ピット
18次	2000.8.1～2001.3.6	白木原１丁目251-1他	3685㎡	店舗建設		近世区画溝、土坑、ピット
19次	2000.11.8～2001.3.23	白木原１丁目261-1他	660㎡	共同住宅建設		近世区画溝、土坑、ピット
20次	**2001.2.26～3.15**	**白木原１丁目280-5他**	**256㎡**	**公共事業代替地**	**本書**	**ピット、平安時代？**
21次	**2001.9.20～10.11**	**白木原１丁目237-1他**	**490㎡**	**共同住宅建設**	**本書**	**近世溝、土坑、ピット**

第１表　後原遺跡調査地点一覧

Ⅲ．後原遺跡第12次調査

１．調査の経緯・概要

後原遺跡第12次調査地は白木原１丁目241-1に所在し、調査面積は約50㎡を測る。西鉄白木原駅前再開発事業代替地として店舗が建設されることに伴い、発掘調査を行なうこととなった。調査は1998年（平成10年）９月24日から９月30日まで実施した。

土坑とピットを検出したが、遺物の出土はなかった。

２．遺構と遺物

検出された遺構は土坑とピットである。

A）土坑

ＳＸ01

調査区南寄りで検出されたもので、不整円形を呈し、約1.5×1.0m、最深部で0.65mを測る。ただし、形状とともに埋土が柔らかいことなど遺構として疑問もある。

遺物は出土しなかった。

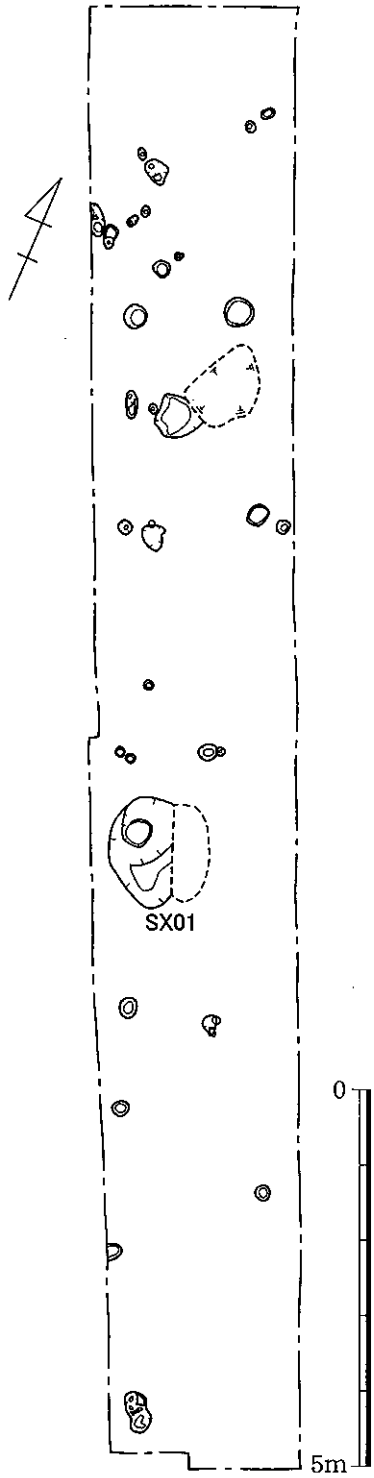
B）ピット

全部で30基ほど検出されたが、建物としてまとまるものはない。

遺物は出土しなかった。

３．小結

調査地は中心部分からはずれた遺構の散漫な地域であった。遺物の出土もなく、年代の判断も困難だが、近世白木原村の周辺部分に当たると思われる。



第３図　第12次調査遺構配置図
(1/100)

Ⅳ．後原遺跡第14次調査

１．調査の経緯・概要

後原遺跡第14次調査地は、白木原１丁目237-13他に所在し、調査面積は約70㎡を測る。県道拡幅事業に伴い、2000年（平成12年）２月19日～３月4日に発掘調査を実施した。調査区は西側のＡ区と東側のＢ区に分れ、両区の間隔は約35ｍである。遺構面の標高は、Ａ区は22.6～22.8ｍで東側（Ｂ区側）に向かい緩やかに高くなり、Ｂ区は23.1～23.2ｍで南側がやや高くなる傾向がある。

溝、ピットを検出し、少量の須恵器、土師器、瓦等が出土した。

２．遺構と遺物

検出された遺構は、溝、ピットである。

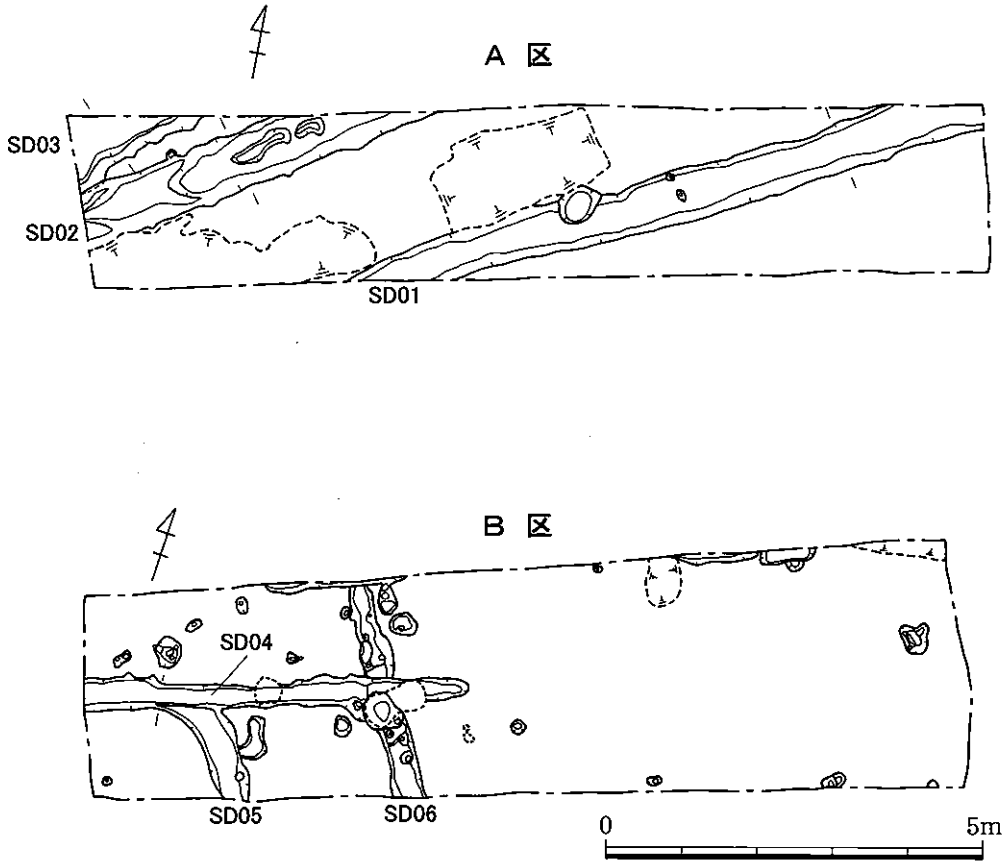
A）溝

SD01（第５図）

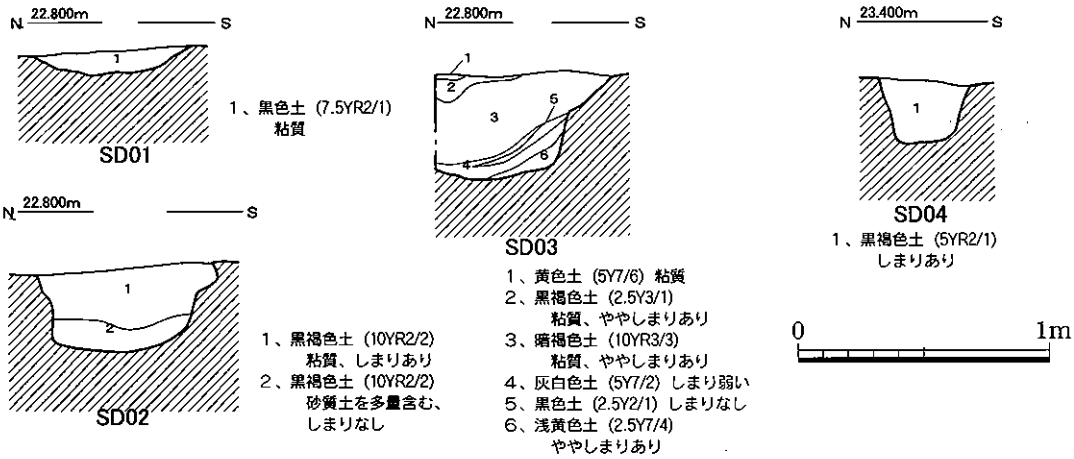
Ａ区で検出された東西方向に伸びる溝で、幅0.6～0.7ｍ、深さ約10㎝を測る。底面の高低差はほとんど無く、流滞水の痕跡も明確ではない。土師器とともに明治期以降の磁器片が出土した。

SD02（第５図、図版３）

Ａ区で検出されたSD01に並行する溝で、幅0.7～0.8ｍ、深さ30～40㎝を測る。調査区内においては、底面のレベルに明確な傾斜は確認できなかった。遺物としては、石炭屑が出土したのみである。



第４図　第14次調査遺構配置図（1/100）



第５図　SD01～04土層図（1/30）

SD03（第５図、図版３）

Ａ区南東隅で検出された溝で、幅0.9m以上、深さ35～40cmを測る。SD01・02に概ね並行するが、調査区東壁際ではSD02に切られる。須恵器甕片、土師器片が出土した。

SD04（第５図、図版３）

Ｂ区で検出された東西方向に伸びる溝で、幅0.3～0.4m、深さ5～40cmを測る。底面のレベルは西に向かい低くなる。直交するSD06を切る。時期不明の陶器細片が出土した。

SD05

Ｂ区で検出された南北方向の溝で、幅0.3～0.5m、深さ20～25cmを測る。SD04との切り合いは確認できず、平面プランを考慮しても、両者は並存した可能性が高い。底面のレベルは北側が相対的に低いが、SD04と比較すると、接続部で５cm程度高くなっている。遺物としては、石炭屑が出土したのみである。

SD06

Ｂ区で検出された南北方向の溝で、SD04に概ね直交する。幅0.3～0.4m、深さ5～25cmを測り、底面のレベルは南に向かい低くなる傾向がある。SD04に切られる。燻瓦が出土した。

B) ピット

10数基を確認したが、建物として復元できるものはない。遺物は出土しなかった。

３．小結

遺構密度は薄く、集落域の縁辺部にあたるものと考えられる。遺構の時期としては、SD03以外は明治期以降に埋没した可能性が高く、溝の性格としては、区画溝あるいは耕作に伴う水路の可能性があるが判然としない。

Ⅴ．後原遺跡第15次調査

１．調査の経緯・概要

後原遺跡第15次調査地は白木原１丁目280-5に所在し、調査面積は敷地面積115㎡のうち約45㎡であった。公共事業代替地として店舗の建築が予定されたため発掘調査を1999年（平成11年）９月17日から10月４日までの間に実施した。

溝２条と土坑１基そしてピットを検出した。土師器小片が出土した。

２．遺構と遺物

検出された遺構は溝２条（SD01・SD02)、性格不明の土坑１基とピットである。

A）溝

SD01（図版４）

長方形の調査区長軸方向にやや蛇行する形で検出され、上端幅約1.5m、下端幅約0.4mを測る。遺構検出面は西が高く、東が低いため深さは西が深くなるが、底面のレベルとしてはほぼ同じである。また、SD01の片方の端部である東南隅部は溜め桝状に深くなる。溝底面より15cm低い。

土師器片が出土したが、小破片のため時期決定はできなかった。

SD02（図版４）

SD01に流れ込むような形で検出された溝で、調査区端で見つかったため検出された長さは1.5mほどで、調査区外へ伸びる。上端幅約0.8m、下端幅約0.4～0.2m、深さは８cmほどであるが、合流部が深くなる。合流部から0.8mのところに溝と直角方向に切り込み状のくぼみがある。幅８cmの細いものであるが、ここに板をはさみこむとちょうど溝をせき止める形になることから、水の流れを調節する堰ではないかと思われる。遺物の出土はなかった。

B）土坑

SX01

調査区西端でSD01と切り合う形で検出されたもので、全容は判明しない。南北方向で1.5m、東西方向で0.4m、深さ30cmの大きさで、隅丸長方形を呈する。遺物の出土はなかった。

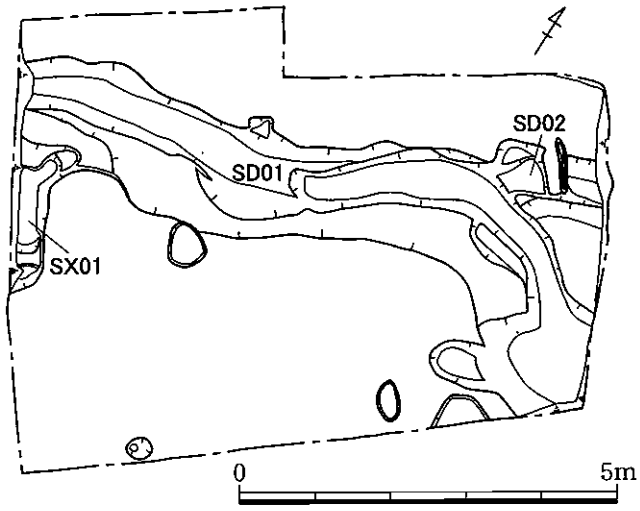
C）ピット

ピットとしたのは５基であるが、いずれもはっきりしないものである。

遺物の出土はなかった。

３．小結

遺物の出土も少なく、年代の判断も困難だが、近世白木原村の周辺部分に当たると思われる。検出された溝が想定したような堰を伴うものであったら、水田部分に当たるものか検討を要する。



第６図　第15次調査遺構配置図（1/100）

Ⅵ．後原遺跡第16次調査

１．調査の経緯・概要

後原遺跡第16次調査地は白木原１丁目525－3他に所在し、調査面積は約18.6㎡であった。公共事業代替地として建物の建築が予定されたため、発掘調査を1999年（平成11年）11月25日と11月26日の２日間実施した。

溝１条とピット４基を検出した。出土遺物はなかった。

２．遺構と遺物

検出された遺構は溝１条（ＳＤ01）とピットである。

A）溝

SD01（図版５）

南北に長い長方形の調査区の南端で、東西方向に伸びる形で一部が検出された。深さは15～18cmと浅い。図に示すように溝の北側の肩しか検出できなかったため、幅はわからないが、深さから考えても小規模な溝であろう。底面のレベルを測ると西側より東側が低い。

出土遺物はなかった。

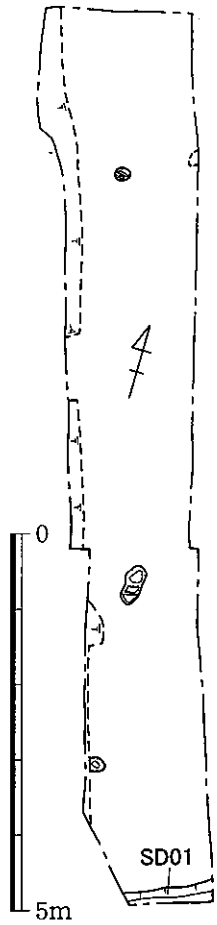
B）ピット

ピットとしたのは４基であるが、北側と南側のピットは径20cm、深さ10～18cm、中央部のピットは２基が切りあっているが、深さ４cmほどでいずれもはっきりしないものである。

遺物の出土はなかった。

３．小結

遺物の出土もないことから年代の判断も困難だが、今までの周辺の調査成果から近世白木原村の一部分に当たると思われる。また、これも周辺の調査成果からだが、南端で検出された溝は集落の南側を限るような性格を持つ溝の可能性もある。



第７図　第16次調査 遺構配置図（1/100）

Ⅶ．後原遺跡第20次調査

１．調査の経緯・概要

後原遺跡第20次調査地は、白木原１丁目280－5他に所在し、調査面積は256㎡を測る。公共事業代替地として共同住宅が建設されることとなり、2001年（平成13年）２月７日に試掘調査、同年２月26日～３月15日に発掘調査を実施した。遺構面の標高は23.75～24.1m、南側に向かい緩やかに高くなる。

複数のピットを検出し、少量の土師器等が出土した。

第８図　第20次調査遺構配置図（1/100）

2．遺構と遺物

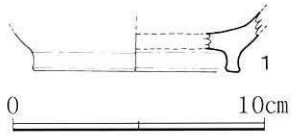
検出された遺構はピットのみである。

A）ピット

シミ状のものが多数存在し、建物として復元できるものはない。遺物を出土したものは５基のみである。

遺物（第９図）

１は土師器碗である。底部が1/6程度残存し、復元高台径8.2cmをはかる。SP03出土。



第９図　出土遺物実測図（1/3）

B）その他の遺物

遺構外より、擂鉢片や明治期の印判染付磁器碗片、土師器片、陶器片などが少量出土しているが、いずれも小片であり図化に堪えない。

3．小結

明確に遺構といえるものは少なく、近接した１次調査の成果を考慮すれば遺跡の縁辺部に相当するといえよう。なお、ピットから出土した土師器椀は平安時代の所産であり、後原遺跡のこれまでの調査で確認されていない。南西側に隣接する御供田遺跡との関連が想定される。

本文図版（1）第20次調査作業風景

Ⅷ．後原遺跡第21次調査

１．調査の経緯・概要

後原遺跡第21次調査地は、白木原１丁目237－1他に所在し、調査面積は490㎡を測る。共同住宅の建設に伴い、2001年（平成13年）11月14日に試掘調査、９月20日～10月11日に発掘調査を実施した。Ａ区の遺構面の標高は23.15～23.5m、Ｂ区の遺構面は23.05m、南東側に向かい緩やかに高くなる。

調査区はＡ区（470㎡）とＢ区（20㎡）に分けられ、このうちＡ区については、工程上の理由から北端を拡張するように２度に分け調査を実施した。

土坑、溝、ピットを検出し、少量の縄文土器、土師器、陶磁器等が出土した。

２．遺構と遺物

検出された遺構は、土坑、溝、ピットである。

A）土坑

SX01（第11図）

Ａ区やや東側で検出された不整形土坑で、南西部分を撹乱土坑によって切られる。一辺約2.0m前後、深さ15cmを測る。

遺物は、磁器瓶類が１点出土した。

SX02（第11図）

Ａ区南壁に沿って確認された土坑で、南側半分は調査区外に延びる。1.3m×0.9m前後の略長方形を呈すると想定され、深さは約35cmを測る。

遺物は、銅緑釉陶器、瓦質土器、土師器が各１点出土したが、いずれも小片のため図化に堪えない。

SX03（第11図）

Ａ区南側で検出された土坑で、約0.9m×約0.7mの隅丸長方形を呈し、深さ25cmを測る。

遺物は瓦片、陶器片が少量出土した。

B）溝

SD01（第11図、図版８）

Ｂ区南側で検出された溝で、幅約1.5m、深さ約70cmを測る。土層観察の結果、下層（４・５層）は粘質土と細砂の互層となり、流･滞水の繰り返しを想定できる。また、２度の掘り直しが認められ、当初の溝幅は0.9m程であったと考えられる。

遺物は、陶器片、土師器片（糸切り）が出土したが、図化に堪えない。

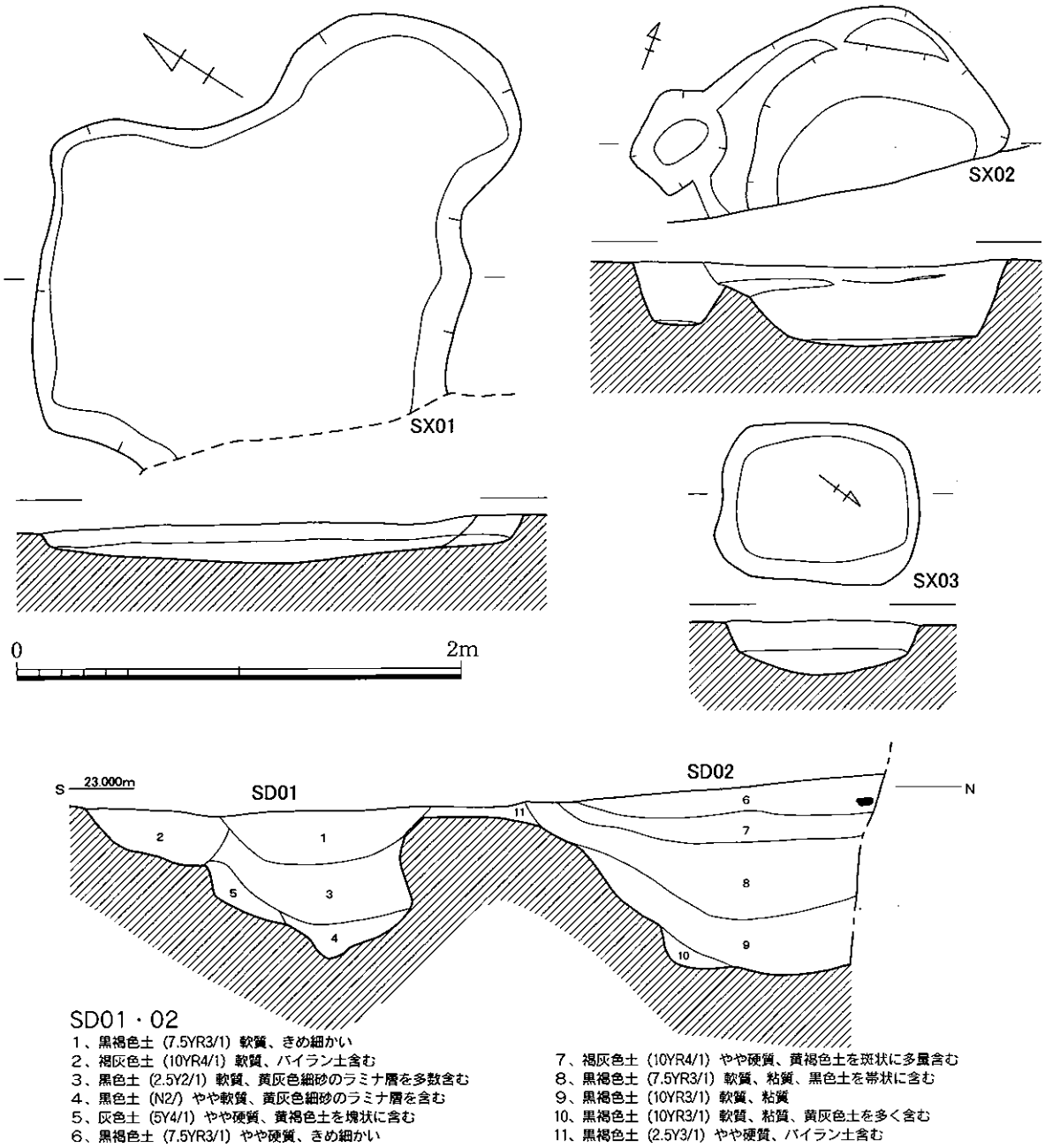
SD02（第11図、図版８）

Ｂ区北側で検出され、SD01に並行する溝で、幅1.6m以上、深さ約90cmを測る。埋土下層は粘性を帯びるが、常時滞水していたとは考え難い。なお、SD01との時間的関係は確認できなかった。

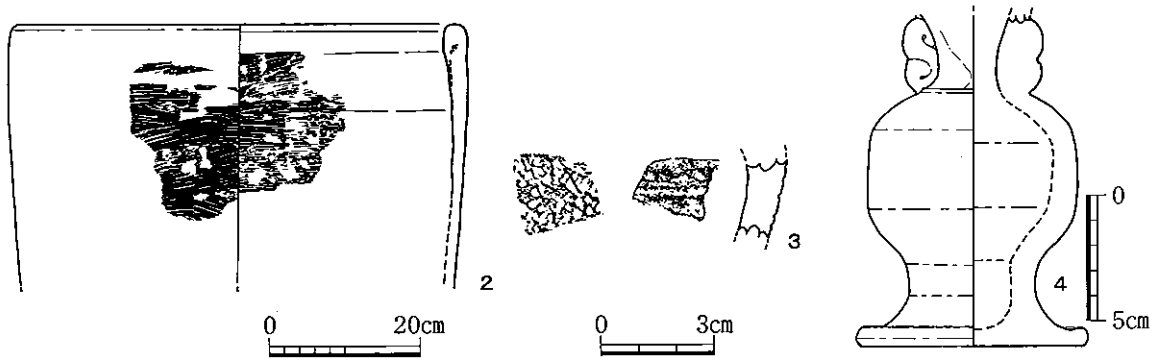
出土遺物（第12図）

２は瓦質の大甕である。口径60.0cmを測り、胴部上半がやや膨らむが、ほぼ直線的なプロポーショ

第10図　第21次調査遺構配置図（1/150）



第11図　SX01～03、SD01・02実測図（1/30）



第12図　出土遺物実測図（2：1/10、3：1/2、4：1/3）

ンを呈する。口縁部内面は明確に肥厚する。口縁部内外面は横ナデ、それ以下は横ハケ（6～7本／cm）を施す。口縁部直下の器面剥落部においても、ハケメ痕が観察され、製作工程の一端がうかがえる。

SD03

A区やや西側で検出された溝で、確認された長さ約3.0m、幅約0.3m、深さ5cmを測る。

遺物は出土していない。

C）ピット

シミ状のものを含めると数多く確認したが、建物として復元できるものはない。遺物を出土したものは6基である。

出土遺物（第12図）

3は縄文土器である。外面は縄文、内面は横ナデを施す。胎土には粗砂、赤色土粒を少量含み、焼成は堅緻である。詳細な時期は不明である。

4は陶器製の仏花器である。口縁部を欠くが、頚部と腰部は強くしまり、頚部にはS字状の耳を2ヶ所貼り付ける。糸切りの外底部以外全面に黄褐色の釉を施し、さらに頚部には褐釉を重ねる。

3．小結

地禄神社の後背地にあたり、遺構密度は薄い。B区で検出されたSD01・02は、14次調査の溝状遺構に連続するとも想定できるが、幅や深さの相違、また出土遺物の時期からしても別遺構の可能性が高い。遺構の性格としては、区画溝あるいは耕作に伴う水路の可能性があり、前者ならば近世集落の北西縁を画するものとして注目される。

また、ピットから出土した縄文土器は、当遺跡では初例である。これまで、検出面より下層や風倒木痕内において遺物は出土していないが、今後の意識的な調査が求められよう。

本文図版（2）第21次調査地から地禄神社を望む

Ⅸ．後原遺跡Ａ地点（前田遺跡）

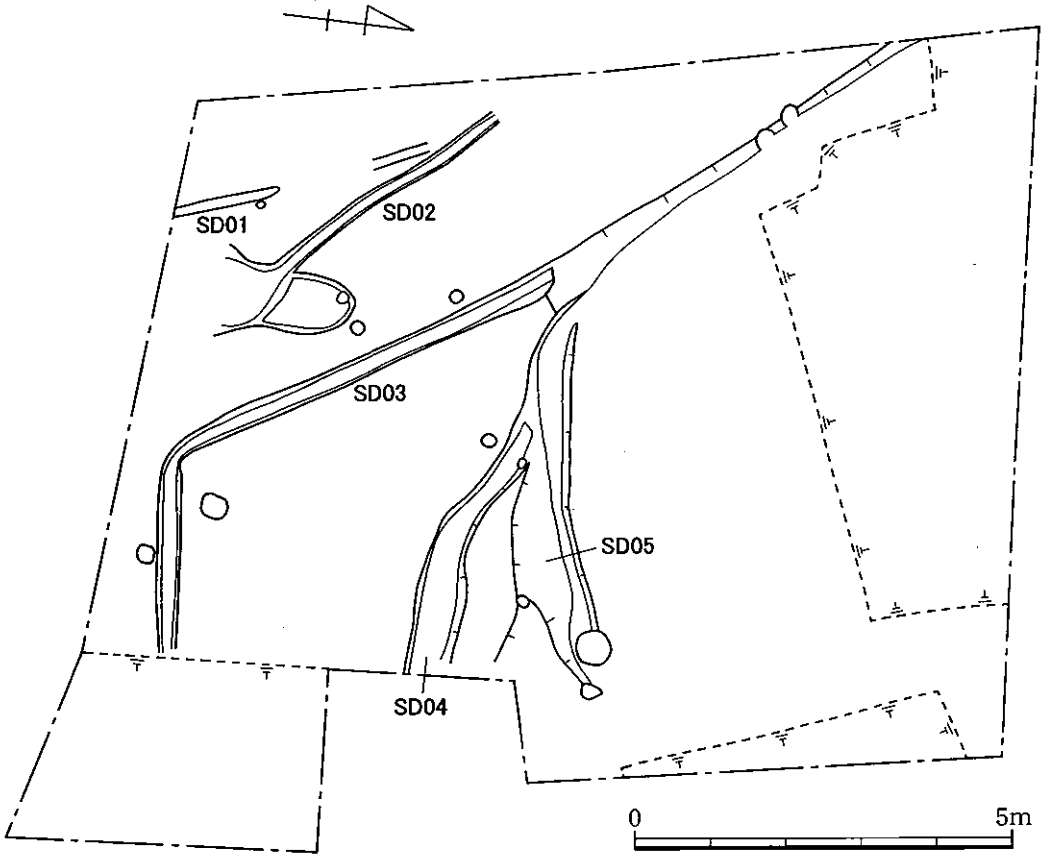
１．調査の経緯・概要

調査時の遺跡名は小字名をとって前田遺跡としたが、その後周辺の開発に伴って発掘調査箇所が増え、当初別の遺跡と考えた後原遺跡に含めたほうが良いと考えられるようになったため、後原遺跡に変更したものである。調査実施時期は、後原遺跡第１次調査以前であり、今回報告をするにあたって混乱を避けるためにＡ地点と呼称する。

調査地は白木原１丁目267－15に所在し、調査面積は120㎡であった。街路築造の代替地として共同住宅の建設が予定されたため、1991年（平成３年）５月８日から５月11日の間に発掘調査を実施した。

当該地周辺は、市街化が進み旧地形がわかりにくい場所となっているが、すべて平坦地というわけではなく、調査地は西側の隣接地より一段下がる。また、調査区はほぼ中央にある段によって北側が10cmほど低くなっており、溝１条を除いて低い部分からは遺構が検出されなかった。

検出遺構は溝５条とピットで、遺物は土師器と磁器が少量である。



第13図　Ａ地点遺構配置図（1/100）

２．遺構と遺物

検出された遺構は溝５条、ピットである。また、遺物は土師器と磁器が少量である。

A）溝

SD01

幅0.1m、深さ10cmの溝で、1.5mほどで切れる。

SD02

幅0.2m、深さ10cmの溝で、４mほどで切れる。南端部が広がる。

SD03

幅0.2～0.3cm、深さ20cmの溝で、直線的に伸び、途中で曲がり前述の段といっしょになる。調査区だけからはその意味はわからないが、その形状から考えて何らかの区画等かなり意識的なものと思われる。

SD04

やや湾曲しながら東西方向に伸びる溝で、幅0.4～0.6m、深さ９～13cmの小規模なものである。調査区中央にある段に当たって消える。検出部分の長さは約3.5mである。

SD05

調査区中央部にある段の下端を巡るように伸びるが途中で切れる。深さは段の高い側に当たる南側で15cm、低い側に当たる北側で５cmである。

B）ピット

ピットは12基であったが、小さなものが多く建物としてもまとまらない。

遺物の出土はなかった。

３．小結

検出された溝はいずれも小規模なものであった。一部なんらかの区画の意味を持つ可能性のあるものもあるが、詳細は不明である。出土した磁器は近世に属するものである。このことから調査地は、近世の白木原村の一部ではあるが、住居地域ではない部分と考えられる。

X．まとめ

1．遺跡の性格とその時期

後原遺跡はこれまでの調査の結果、近世白木原村の一集落「本村」に相当することが明らかとなっている。

今回、第12・14～16・20・21次およびＡ地点の調査成果を収録したが、いずれも遺構密度は低く、出土遺物も僅少であった。したがって、時期を決定しうる遺構も少ないが、21次やＡ地点の調査、さらにこれまでの調査成果を勘案すれば、多くの遺構は近世の可能性が高く、14次調査でわかるように明治期以降の遺構も含まれていると判断できよう。

遺構の種類としては、溝、土坑、ピットがあるが、ピットは建物としてまとまるものはなく、土坑も性格のわかるものや遺物を多量に出土するものはなかった。このことから、いずれの調査地点も近世の居住域とは考え難く、集落の縁辺部と理解することが妥当であろう。溝の性格としては、耕作用の水路（15次調査SD02など）や区画溝（21次調査SD01・02）などの機能が想定されるが、今回の調査成果だけで判断することは出来ない。

第２図は包蔵地の範囲と調査地点を示したもので、第14図は現在の遺跡周辺と大正15年のそれを比較したものである。いずれの調査地点も、包蔵地の縁辺部にあたり、かつ詳細な対照はできないが、大正15年段階にいたっても集落の縁辺部に相当することが分かる。このことは、今回の調査地点の性格を傍証するとともに、近世の「本村」が大正末期まで大きく姿を変えることなく続いていたことを示すものといえよう。

2．近世村落の景観

第２・14図で分かるとおり、遺跡周辺は飛躍的に都市化を遂げているものの、村の鎮守である地禄神社、神社の前でクランクする細道、旧集落の入口部分に残る猿田彦などは、近世の村の面影を現代に伝えてくれている。後原遺跡は、これまで計22地点約15900㎡の調査を実施したが、本書を

第14図　大正15年（右）と現在（左）の遺跡周辺（1/25,000）

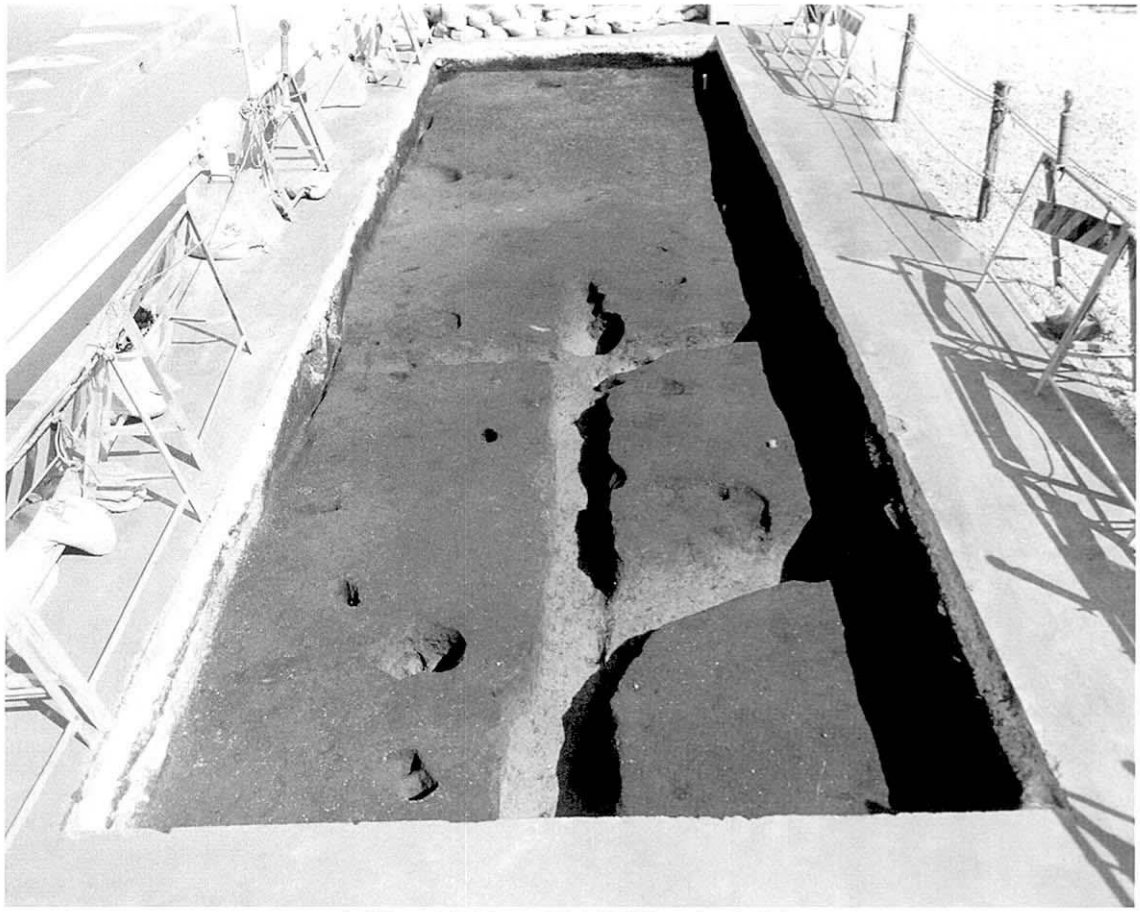
含め報告した地点は13地点約3900㎡に過ぎない。未報告の調査地点の中には近世集落の中心部分も複数含まれており、今後これらの調査成果や文献資料を合わせて検討することによって、近世集落の景観復元やその動態を解明していく必要がある。

図　　版

(1)第12次調査 北西部完掘状況（南から）

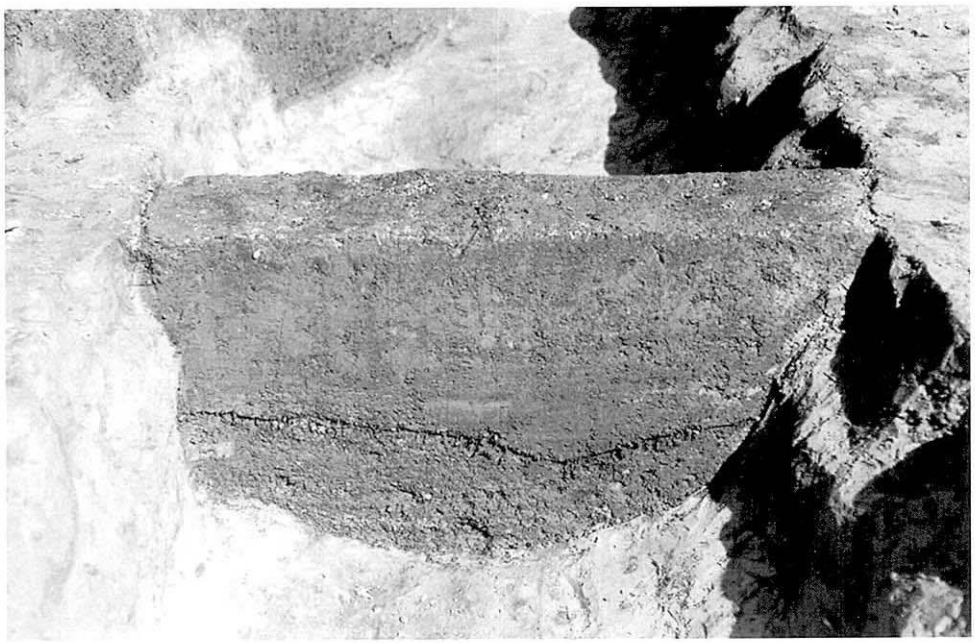
(2)第12次調査 北東部完掘状況（南から）

図版２

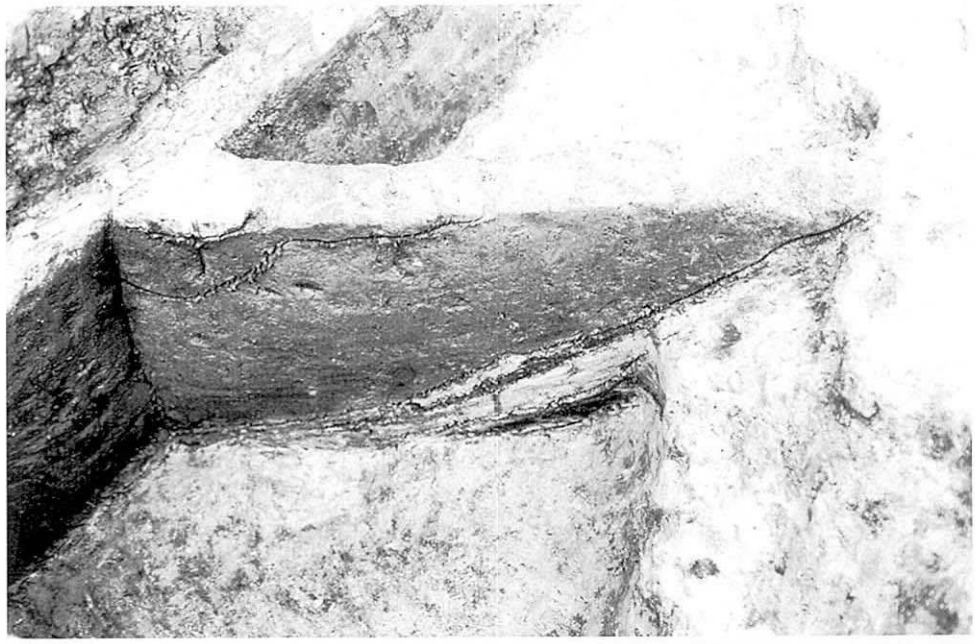


(1)第14次調査　Ａ区完掘状況（西から）

(2)第14次調査　Ｂ区完掘状況（西から）



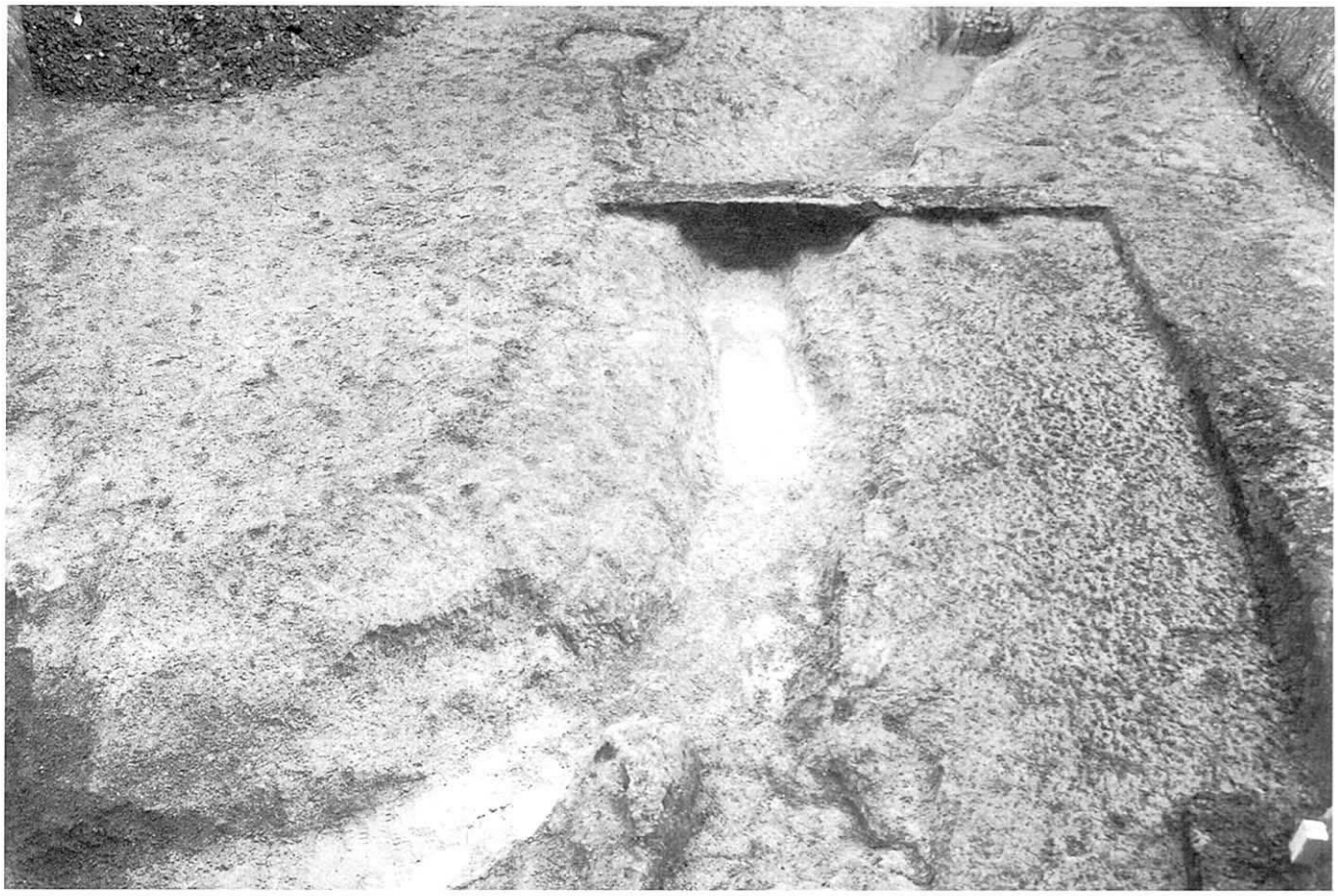
(1)第14次調査
ＳＤ02土層堆積状況
（西から）



(2)第14次調査
ＳＤ03土層堆積状況
（西から）

(3)第14次調査
ＳＤ04土層堆積状況
（東から）

図版４

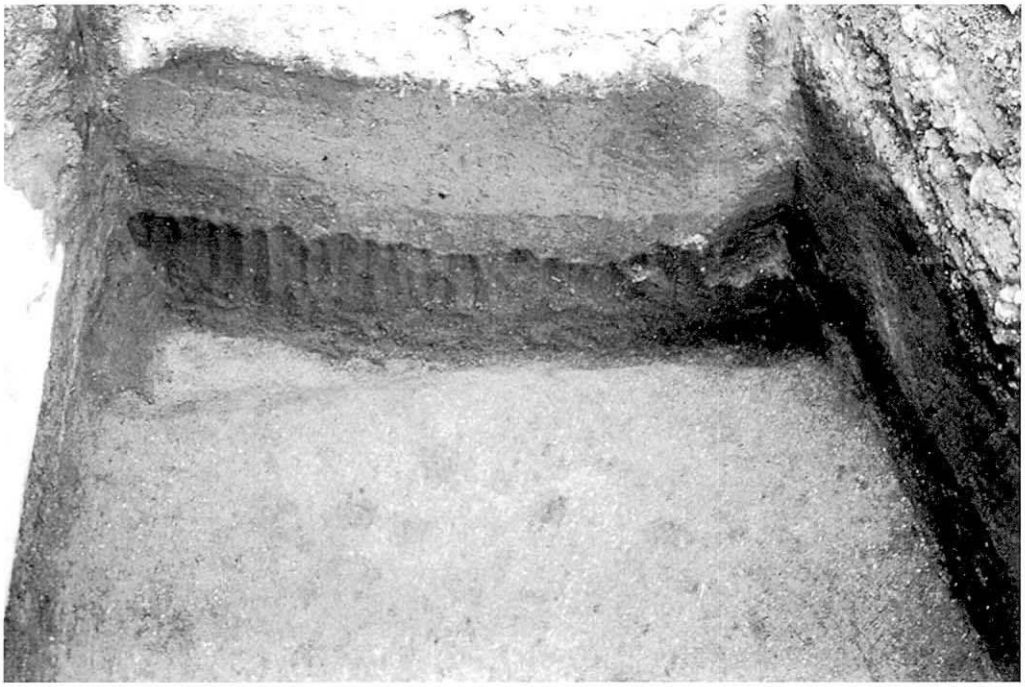


(1)第15次調査　ＳＤ01完掘状況（東から）

(2)第15次調査　ＳＤ02完掘状況（北西から）

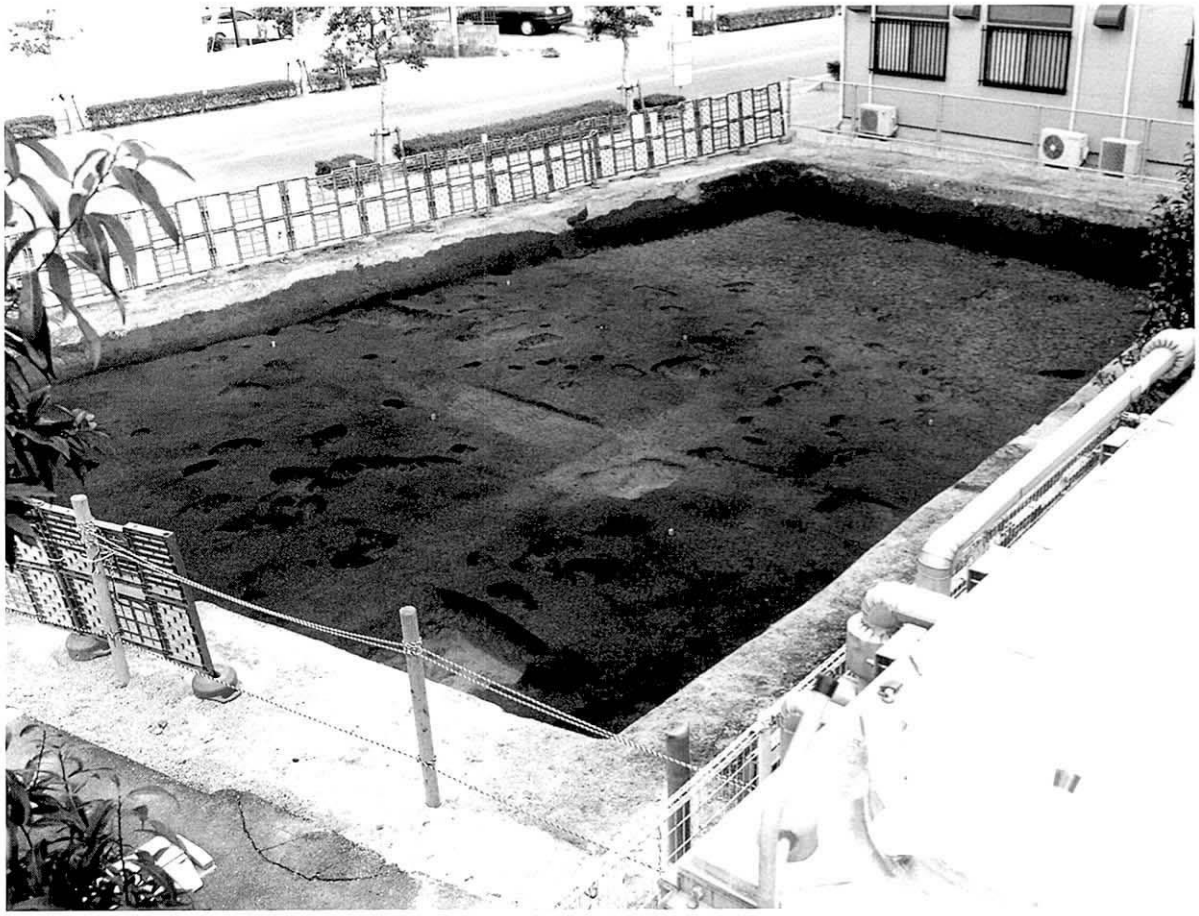
(1)第16次調査　北半完掘状況（北から）

(2)第16次調査　南半完掘状況（南から）



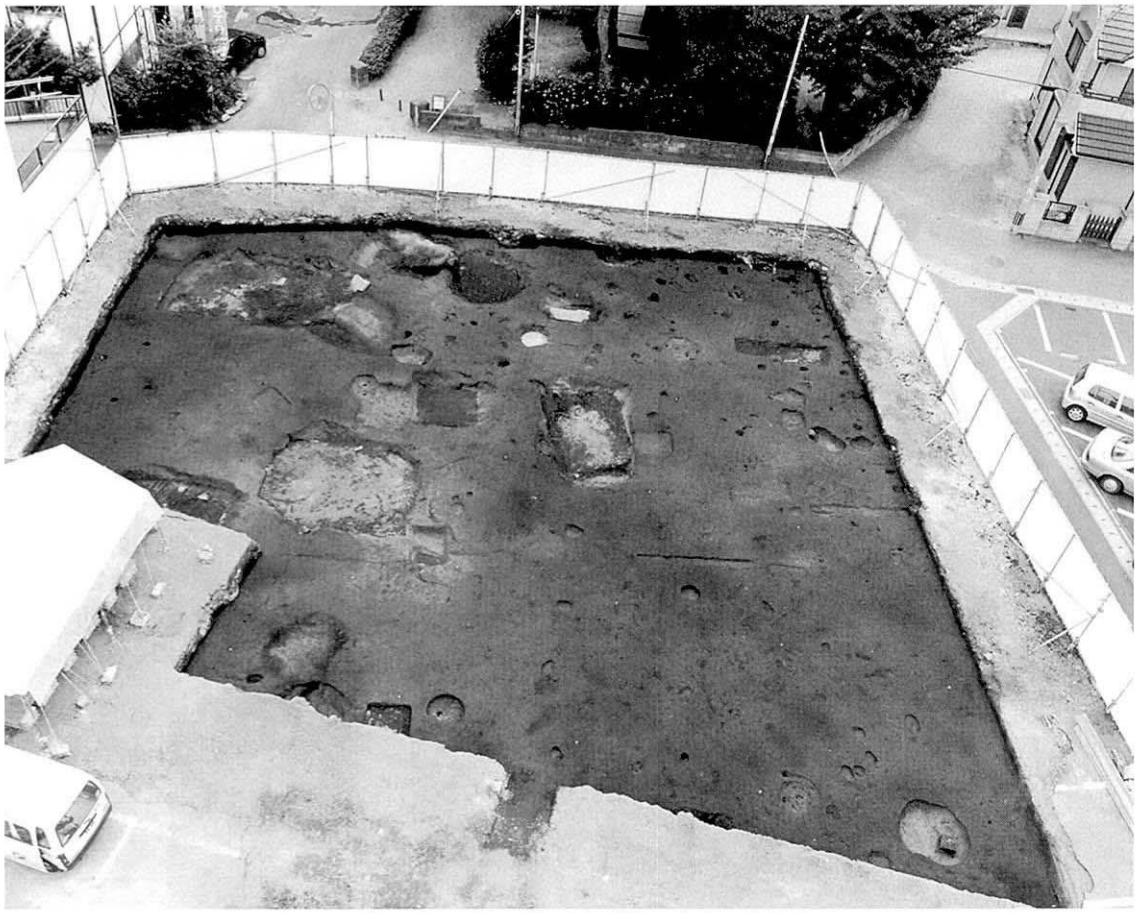
(3)第16次調査　ＳＤ01完掘状況（北から）

図版６

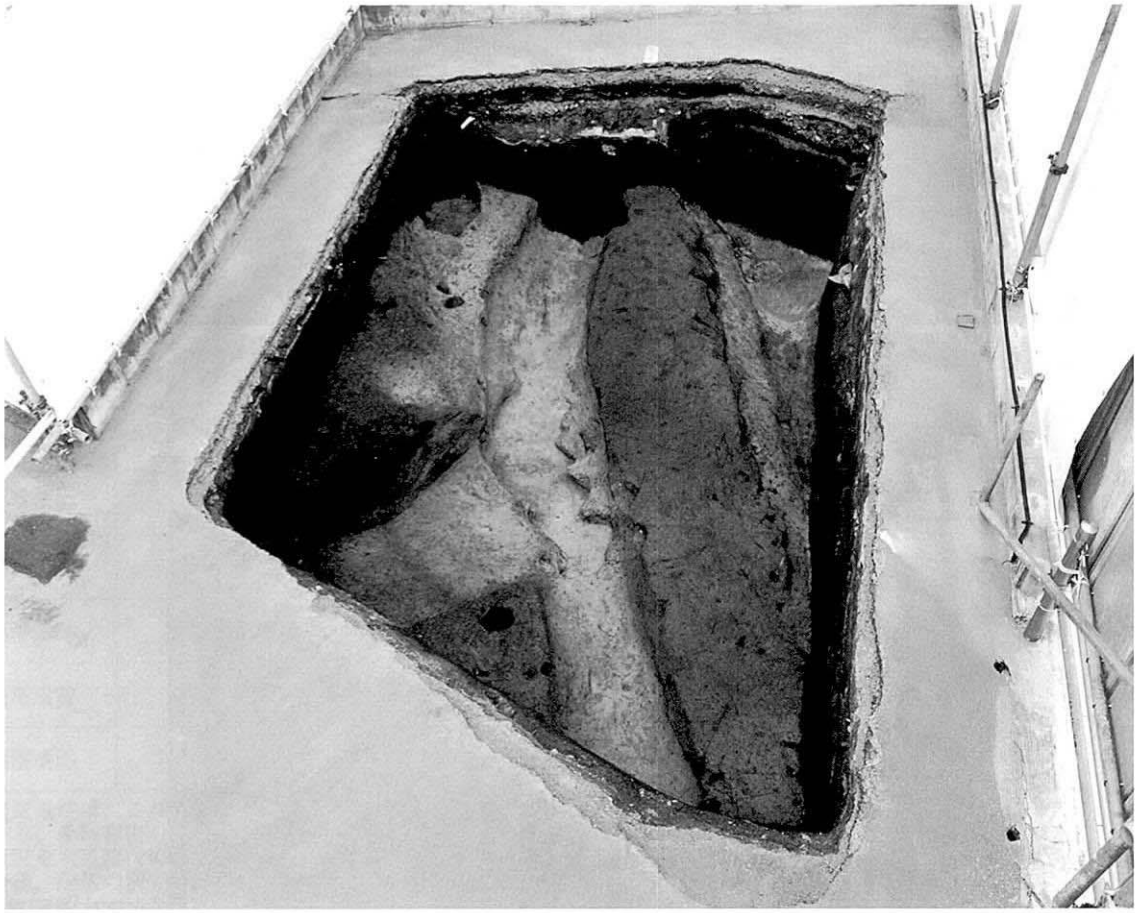


(1)第20次調査 完掘状況（北西から）

(2)第20次調査地点から地禄神社を望む（西から）



(1)第21次調査　Ａ区完掘状況（北西から）



(2)第21次調査　Ｂ区完掘状況（東から）

図版８

(1)第21次調査
Ａ区北側拡張部完掘状況
(東から)

(2)第21次調査
ＳＤ01・02土層堆積状況
(東から)

(3)第21次調査
作業風景

報告書抄録

ふりがな	うしろばるいせき
書名	後原遺跡 Ⅱ
副書名	
巻次	
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第93集
編著者名	林潤也　舟山良一　丸尾博恵
編集機関	大野城市教育委員会
所在地	〒816-8510　福岡県大野城市曙町二丁目２番１号　　電話092（501）2211
発行年月日	2010年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
うしろばるいせき 後原遺跡 第12次調査	ふくおかけんおおのじょうししらきばる 福岡県大野城市白木原１丁目 241-1			33° 31′ 43″	130° 28′ 54″	19980924～ 19980930	50㎡	公共事業 代替地
うしろばるいせき 後原遺跡 第14次調査	ふくおかけんおおのじょうししらきばる 福岡県大野城市白木原１丁目 237-13他			33° 31′ 44″	130° 28′ 55″	20000219～ 20000304	70㎡	街路築造
うしろばるいせき 後原遺跡 第15次調査	ふくおかけんおおのじょうししらきばる 福岡県大野城市白木原１丁目 280-5			33° 31′ 37″	130° 28′ 51″	19990917～ 19991004	45㎡	公共事業 代替地
うしろばるいせき 後原遺跡 第16次調査	ふくおかけんおおのじょうししらきばる 福岡県大野城市白木原１丁目 525-3			33° 31′ 37″	130° 28′ 53″	19991125～ 19991126	18㎡	公共事業 代替地
うしろばるいせき 後原遺跡 第20次調査	ふくおかけんおおのじょうししらきばる 福岡県大野城市白木原１丁目 280-5他			33° 31′ 40″	130° 28′ 51″	20010226～ 20010315	256㎡	公共事業 代替地
うしろばるいせき 後原遺跡 第21次調査	ふくおかけんおおのじょうししらきばる 福岡県大野城市白木原１丁目 237-17他			33° 31′ 43″	130° 28′ 53″	20010920～ 20011011	490㎡	共同住宅 建設
うしろばるいせき 後原遺跡 Ａ地点	ふくおかけんおおのじょうししらきばる 福岡県大野城市白木原１丁目 267-5			33° 31′ 38″	130° 28′ 55″	19910508～ 19910511	120㎡	公共事業 代替地

所有遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
後原遺跡 第12次調査	集落遺跡	江戸時代	土坑・ピット	なし	
後原遺跡 第14次調査	集落遺跡	江戸時代 明治時代	溝・ピット	須恵器･土師器･瓦	
後原遺跡 第15次調査	集落遺跡	江戸時代	溝・土坑・ピット	土師器	
後原遺跡 第16次調査	集落遺跡	江戸時代	溝・ピット	なし	
後原遺跡 第20次調査	集落遺跡	平安時代 江戸時代	ピット	土師器	
後原遺跡 第21次調査	集落遺跡	江戸時代	溝・土坑・ピット	縄文土器・瓦質土器 土師器・陶磁器	
後原遺跡 Ａ地点	集落遺跡	江戸時代	溝・ピット	須恵器	

要約

後原遺跡は、これまでの調査の結果、近世白木原村の一集落「本村」に相当することが明らかとなっている。今回報告した７ヶ所の調査地点は、いずれも遺構密度が低く、出土遺物も僅少である。こうした状況や大正時代の地図を参考にすると、これらの地点は集落の縁辺部にあたるものと考えられる。

今後、周辺の調査地点や文献資料を合わせて検討することによって、近世集落の景観復元やその動態について明らかになるものと期待される。

大野城市文化財調査報告書　第93集

後 原 遺 跡 Ⅱ

平成22年３月31日

発 行　大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町２－２－１

印 刷　山口印刷株式会社
伊万里市二里町大里乙3617-5